

学 会 報 告

2005年度日本経済学会春季大会

櫻井 武司

日本経済学会の春季大会は2005年6月4、5日の両日にわたり、京都産業大学で開催された。私が経済学会に出席するのは、1996年以来である。当時はまだ理論・計量経済学会と称していた。不確かな記憶では、大会は毎年秋に1回だけだったはずである。

当日の受付で大会参加費3,000円を支払う。しかし、報告要旨集はもらえない。聞けば、報告要旨はウェブで公開するので、数年前から要旨集を印刷することは止めたのだそう。10年近い歳月は、技術や制度を大きく変えたのだと、今さらながらに痛感した。当時も今も変わらないのは、懇親会がないことである。これについては、当初からなかったのか、途中で中止したのか私は知らない。

懇親会を開かないことに象徴されるように、おそらく経済学者一般の気質を反映して、学会の雰囲気は大変ドライでビジネスライクである。とはいっても、もちろん、大会には友人や知人と再会し、旧交を温める場としての機能がある。しかし、この学会では同窓会的な感じはあまりしない。その点で、日本農業経済学会の大会とは異なっている。これは、農学部と経済学部組織の違い、また両学問分野における学者養成のプロセスの違いを反映するものと思われる。いずれにしても、私自身は日本で大学院教育を受けていないので、学会参加に同窓会的なものは期待していないし、期待することもできない。私には、自分のアイデンティティを感じるような「所属学会」はないのである。

したがって、私が学会に参加するのは自分の研究を発表するためである。その意味では、経済学会や農業経済学会に限らず、様々な学会に所属し、大会に参加するよう努めている。しかし、自分が報告しない場合には、原則と

して大会には参加しない（例外は都内で開催される場合）。経済学会の場合、討論者が事前に指定され、討論者から論文に対するしっかりとしたコメントがもらえるので、学会で発表することは非常に有益である。しかし今回は、自分で報告しないのに、京都で開催される大会に参加したので異例なことである。報告はしないものの、討論者になることを引き受けたという事情はあるが、はなから参加するつもりがなければ、討論者すら引き受けなかったであろう。

さて、2日にわたる大会で、開発経済学のセッションは2つあり、全部で7人の報告があった。そのうち4人は大学院在籍中または博士課程を終えたばかりで、1人を除き全員が米国の大学院で教育を受けている。わが国での就職活動を目的とした学会参加であることは明らかであるが、経済学会は締め切りが早いので、応募した時点では求職中であっても大会までには職を見つけている場合もあり、必ずしも求職中の学生だけではなかった。同窓会的な機能を持たない経済学会であるが、この例からもわかるように、参加者の多くは日本の大学との同窓会的なつながりを持たず、研究成果の発表を通じて就職活動をするを目的としている。そうであれば、もし懇親会があるなら、その場も自己宣伝のよい機会になるだろう。しかし、買い手の側が懇親会に出席する動機を持たないことが問題である。

久しぶりの学会参加は、ちょうど10年前私が理論・計量経済学会の大会に初めて参加した当時のことを懐かしく思い起こさせた。1995年9月のことだ。同年10月1日付けで農業総合研究所に採用されたのだから、大会で報告した時点で内定していたはずだが、記憶は定かではない。しかし確かなことは、大会に応募した時には、まだ米国の大学院に在籍して求職中だったということだ。今回、開発経済学のセッションで発表していた大学院生たちと同じ立場だったのである。

ご無沙汰していた経済学会の大会に10年ぶりに参加したのは、学会報告を再開するための布石である。10年の歳月は多くのものを変えてしまった。私は10年前の原点に帰りたいと思っている。